

平家物語の因果觀的構想

——覺一本の評価をめぐって——

佐 伯 真 一

(一)

従來の覺一本の構想論は、諸本關係を一応措いて覺一本の叙述構造そのものを探ったものと、諸本との比較によって覺一本の構成上の整理などを論じたものとに大別できると思う。無論両者は互いに重なり合うものであり、たとえば山下宏明氏「平家物語研究序説」の諸本間の部分的異同の指摘には、構想の問題に関わるものが多く含まれているが、それらの部分的特徴を総合した、覺一本全体の構想がどういうものかということについては、同書では充分触れられてはいないだろう。またたとえば頼朝拳兵衛記事の問題から、語り系の「モティーフ」を「平家一族の滅亡の哀史」であるとされた麻原美子氏の論考等^①、語り系の、平氏滅亡を中心とした物語としての性格を指摘する論は、語り系の構想を論ずる上で重要な意味をも

つが、麻原氏の論が「モティーフ」の語を用いられたように、その内容は「構想」論とは今一步隔たっているだろう。総じて、諸本比較から提出された問題と、覺一本の構想論・思想論とは、これまで充分結合されていなかったように思える。

そのような意味で、かつて渥美かをる氏が「原作者」の意図を、「前半に清盛を描き、その因果応報として後半で平氏の滅亡を記す」「二部構成」にあつたとされた見解は^②、平家物語の構想の問題を諸本の展開と關係づけたものとして、今なお貴重な論考であるといわねばならない。私見では、この「二部構成」は、前記麻原氏論文が指摘する、語り系の「平家一族の滅亡の哀史」としての性格と深く関わっていると思われる。更に進んで、語り系と「増補系」(以下「読み本系」と呼ぶ)の相違を、このような構想の有無に求めてもよいとさえ思われるのである。しかし渥美氏は右のような「二部

構成」は「原作者」のものであって「詞章の増補を見るに及んでその構成は次第に霞んできた」とされるのだが、その点についての説明は充分納得のいくように展開されてはいない。

氏の論の是非そのものについては、「原平家」観の問題にも関わるので、ここで完全に論ずることはできないのだが、読み本系の問題を別にして語り系の成長過程のみを見ても、屋代本から覚一本への間で、その構成が「霞んできた」とはいえないのではないか。このような構成を支える考え方が、平家物語本文の中で最も明瞭に示されている。

これはただ入道相国、一天四海を掌に握って、上は一人をも恐れず、下は万民をも顧みず、死罪・流刑思ふ様に行ひ、世をも人も憚られざりしが致す処なり。父祖の罪業は子孫にむくふといふ事疑ひなしとぞ見えたりける（「女院死去」）（以下、特に断るもの以外、平家物語の引用は覚一本）

という一文が、覚一本に至ってはじめて記されたものであるという一事を見ても、それは明らかであると思われるのである。灌頂巻において、一門の運命を女院の六道体験になぞらえて語った後、彼女達の往生を記す直前におかれたこの一文は、覚一本の平氏興亡の物語叙述の結論といってもよい重みをもっているが、読み本系諸本は灌頂巻を立てると否にかかわらずこの一文を欠き、屋代本等の初

平家物語の因果観的構想

期語り本もまた同様なのである。

現存諸本の上に立脚する限りにおいては、涅槃氏のいわれるような因果観的構想は、「原平家」のものと考ええるよりも、覚一本において最も明確になっていると考えざるべきではないか。すなわち、平氏中心の物語という傾向を有する語り系の成長の中で、次第にまとめあげられていったものなのではないか。以下、物語の叙述に即して、その問題を考える。

(一)

清盛が悪行によって悪因を蓄積し、その報いによって平氏一門が滅亡するという構想にとって、重要な意味をもつのが、鹿谷事件の結果である鬼界島流人譚である。この部分の終末部の俊寛の恨みの叙述を、「か様に人の思ひ歎きのつもりぬる平家の末こそおそろしけれ」と結ぶことによって、鹿谷事件の犠牲者達と平氏の運命を結びつけるのが、語り系の特徴的姿勢であることは今更いいうまでもない。この点が、この結びを欠く読み本系との大きな相違であるわけだが、両系統の相違は単にこの結文だけにあるのではない。

語り系において、この結文が強い印象を与える一因は、それまでの叙述の中で、「姫が事こそ心苦しけれ共、それもいき身なれば歎きながらもすござんずらん」といった恨み多い言葉を残しつつ、自

ら食を断って死んでいく俊寛の姿が具体的に形象されているからであり、また、有王の「おぼしめされ候し御心の内さながらむなしうてやみ候にき」の言葉によって、その「思ひ歎き」が伝えられているからである。

ところが、たとえば四部本にはこれらの語句はない。逆に四部本では、都へ帰れと説得する俊寛を制して島に残り、「立前後取疏黄拾荒布過夏」と、病死する俊寛に長い間献身的に尽す有王の姿の方が、中心的に描かれているとさえいえるのである。この傾向は読み本系に共通するものであり、詳細な本文を有する延慶本ではさらに有王の姿が際立っていて、「有王丸力志タメシクタクソ覚シ」「ミメカタチ心サママテモ吉童ニテソ有ケル」等、有王賞讃の句もあり、有王に事件の報告者の役割を与える語り系に比べて、大きな関心を有王の方に向けているといつてよい。すなわち、有王の献身的努力による主従の奇跡的邂逅を興味の中心とした有王説話、今成元昭氏の言葉を借りれば「邂逅談」的な傾向が、読み本系には見られるといえる。

有王説話は、独立的な説話としての性格の強い「邂逅談」的傾向を示す読み本系の形と、俊寛の悲惨な最期を中心に置くことよって平氏の運命に関与する事件として描かれる語り系の形との間に、顕著な相違が見られるわけである。

有王―俊寛と類似の問題は、康頼・成経と俊寛の関係においても存在する。たとえば、語り系の「足摺」においては、赦文を俊寛一人が受け取る劇的構成をはじめ、いわゆる「対象主体化」の文体をも交えて、俊寛の悲歎のみが強く語られている。しかし、始めの部分に関して、延慶本・長門本・盛衰記は、使者の到着に際し、康頼・成経が隠れていて、使者とわかつてはじめて出てくるという構成をとるため、二人の心理描写が長く続く。また四部本は三人がそろうて赦文を受けとる形をとり、各々の描写に同等の筆を費している。あるいは成経の慰めにおいても、「…と慰めたまへ共、人目も知らず泣もだえけり」と、俊寛の悲しみを際立たせるばかりでしかない語り系の形に対して、四部本では、「少将聞之、何可苦カク乗ノリ船フネ捨テ置キ九国地上ノ都ノ有リ是レ何レ是レ候ニ少シ縁ノ事ト被シ思フ食ハ候ニ謀ル叛ル衆ノ中ニ此レ僧ト都ノ…」と成経らの側から事件を描く。延慶本等も、成経等の描写によって俊寛の悲しみの描写を中断しているのである。

これらは、語り系、とりわけ覚一本の表現の巧みさの問題でもあるのだが、単に表現の巧拙の問題ではなく、それ以前に、俊寛を中心にすえて描くかどうかという姿勢の問題があることは、「足摺」前後の叙述態度によっても明らかなのである。すなわち、覚一本は「御産」「頼豪」末尾に「俊寛僧都一人赦免なかりけるこそうたて

けれ」の句を付加し、俊寛の恨みを平氏の運命と結びつけて語る姿勢が顕著なのであり、覚一本の「足摺」はこれらの句に結びつくものとして、俊寛中心に語られているのである。これらの句は屋代本にもないもので、語り系の成長の結果、覚一本が意識的に俊寛中心の叙述を行なうまでに至っていることを推測させる。

このように、有王や康頼・成経ら、すなわち、個々の話を独立した説話として見た時の主人公たりうる人物に比べて、俊寛に重きをおいて語る覚一本の叙述は、俊寛の悲歎の強調をもって、鬼界島流人譚を平氏の運命に関わらせていこうとする意図を、背後にもっているといえるのである。

しかも、こうした俊寛の悲劇をひき起こした責任は、ただ漠然と平氏全体にあるのではない。平氏の頂点にあって絶対的な権力を握る清盛の意志が、流人達の運命を常に支配してきたのである。康頼・成経の赦免、俊寛の赦免もれが清盛の好悪によっていることは無論諸本に共通するのだが、覚一本が清盛の支配を強調するのはそれだけではない。康頼・成経の赦免の原因は、教盛・重盛の運動以上に、物語中では「卒都婆流」「康頼祝言」の厳島・熊野の靈験によって説明されているのだが、覚一本の「卒都婆流」は、都に着いた卒都婆を清盛が見て、「入道も石木ならねば、さすが哀げにぞの給ひける」と結ばれ、「入道相国、おはれみ給ふ上は、京中の上下、老

平家物語の因果観の構想

たるもわかきも、鬼界カ嶋の流人の歌とて、口ずさまぬはなかりけり」と、「蘇武」に続いていく。(傍点部は屋代本になし)屋代本も含め、語り系の「卒都婆流」では、鬮諍録・延慶本等に詳述される、康頼の母に卒都婆が届けられる部分が、大きく簡略化されているため、卒都婆の効果そのものが、右の一文の「清盛の同情」という結論に集約されている傾向が強い。延慶本にはこの一文がない。鬮諍録^⑩はこの一文に近いものを有するが、この話の結論としては、「昔蘇武、作^レ五言詩^ヲ、止^レ母恋^ヲ、今康頼、読^ニ二首歌^ヲ、慰^レ親思^ヲ」と、卒都婆の効果を「親の思いを慰む」ものとして把握している。これらに比べ、語り系では、このような靈験談も、清盛の同情という現実的效果に導かれていることに注目したい。

さらに微細に見れば、「足摺」における成経の慰めの言葉の中で、「宰相ニモ且ハ吉様ニ申…」とある延慶本に比べて、語り系に「入道相国の気色をもうかがふて…」とあることに注意したい。この部分を独立した説話として見たときには、成経の援助者としてしばしば登場する門脇宰相教盛の名が挙がるのは自然な形なのだが、そのかわりに「入道相国」を言う語り系は、流人達の運命を握る人物として、常に清盛を意識しているのである。

清盛を、全ての運命を握る権力者として設定することによって、事件の責を彼に負わせ、もって物語の前半部を平氏滅亡の因をなす

清盛の悪行の叙述として位置づけていく、語り系、とりわけ寛一本の構想は、これらの中に典型的に見られるのである。

この他にも、寛一本の前半部には、上述の構想のもとに物語を統合していく傾向が、屋代本と比べてもなお顕著に見てとれる。山下宏明氏等が既に指摘されていることだが、「善光寺炎上」を史実に反する位置に移し、山門事件もるとも、「平家の末になりぬる先表やらん」というやや無理な形で結ぶ点にも、屋代本のような編年体的構成をも崩した、寛一本の構想が示されている。あるいは「小督」を巻六に移して、高倉帝の死をさえ「か様の事共に御悩はつかせ給ひて、遂に御かくれありけるとぞきこえし」と清盛の悪行に關連づけていること等も指摘できよう。このようにして、寛一本の前半部は清盛・平氏の悪因蓄積の過程として構想されているのである。

このように個別の説話を因果観的な平氏興亡史の構想のもとに統一していく語り系、とりわけ寛一本の特色は、後半部を平氏滅亡の叙述としてまとめあげている点にも見てとれる。たとえば一谷合戦における盛俊・忠度・敦盛らの最期が、読み本系に見られる、猪俣則綱・岡部六弥太・熊谷直実らの武勳談・癡心談の形態から、平氏の武士・公達の最期を語ることを中心とした章段へと変質していることである^⑤。また、巻十二の六代譚とその後の残党根絶の記事が、

灌頂卷特立とあいまって、平氏の徹底的な全滅の叙述として整理されていることなども注目されるが、今はこれ以上触れることはできない。

(三)

このような寛一本の構想のあり方は、何らかの思想的立場に立った編者が、さまざまの説話を恣意的に改変し、統合していくというような編集作業とは大きく異なるものである。上述の鬼界島流人譚においても、俊寛の怨霊が平氏に報いるという発想は、俊寛を語る説話そのものに内在していたものであろう。また、延慶本「成親卿北方君達等出家事」に見られる、経遠の娘（鬪諍録・長門本・盛哀記では介錯の僧智明の娘）の怪死の話には、成親の怨霊が加害者にたたるという発想が見られ、鹿谷事件の犠牲者の怨霊が平氏に報いるという考え方が、決して語り系作者の独創などではないことが知られる。ただ、語り系は、そうした説話の想像力に依拠しながら、報いの対象を清盛と平氏の将来にしばることによって、物語を秩序立てているのである。

清盛がさまざまの人間の運命を握る者として設定されることによって悪因の責を負わされていることは既に述べたが、それも、清盛を多くの説話の主人公と関係づけていくことによって、彼の像を

「一天四海を掌に握る」者として巨大化していくという、説話的な想像力の上に成立する方法なのである。それゆえ、語り系が清盛を悪因蓄積者として位置づけていく方法は、清盛を倫理的に断罪・非難し、あるいは卑小な悪役におとしめるというような方法とはかけ離れている^⑧。たとえば、覚一本は「祇王」冒頭を「入道相國、一天四海をたなごころのうちににぎり給ひしあひだ……不思議のことをのみし給へり。たとへば……と語り出し、「祇王」を清盛の「不思議のこと」の一つとして位置づける。屋代本（拙書）も類似的冒頭を有することからは、語り系が本来こうした位置づけを意識していたことがうかがえる。読み本系（延慶本・盛衰記）はこの一文をもたないが、高橋伸幸氏^⑨によって四部本の裏書として紹介された「刀後聞」「平家族伝抄」の「義王義如事」は、冒頭に次のように記す。

抑此入道世盛間 有為无常可何不知 惣世情疎 明暮誇酒宴
夜晝被變遊戯 榮花令傷心 復聞腹悪人 常賞罰為宗科福事、
斯中云義王義如杜…（引用は「刀後聞」による。「族伝抄」もほぼ同文）

ここに描かれた清盛像が、語り系の「祇王」冒頭の、「一天四海を掌に握る」という表現に比べてむしろ矮小化されており、倫理的に非難されている色彩が濃いのには明らかだろう。「刀後聞」「族伝抄」については、四部本の裏書という位置づけに疑問がもたれていて、

平家物語の因果観の構想

もとよりこれが読み本系の姿勢を示すとはいえないのだが、ただ清盛を非難し、悪人化するという意味だけならば、こうした描写もありえたのだということに注意したいのである。語り系の清盛が、ほんの気まぐれによって祇王らの運命を翻弄する巨大な権力者としての像をもっていることは、このような悪人化とは大きく隔たったものである。

あるいは巻六「慈心坊」の問題がある。読み本系は、「冥途蘇生記」から大部分を引用する延慶本をはじめ、それぞれが提婆達多を持ち出して、清盛の慈恵僧正再誕説を清盛＝権者説によって説明する。この説話の本文内容をほとんど欠き、意味の通じにくい四部本さえもが、説話の収載よりもこの巷説への釈明・合理化を目的としたかのように、提婆達多を云々する程だから、悪行人清盛を慈恵の再誕とする説話の処理に、編者がいかに苦労したかわかろうというものである。ところが語り系は、ここではそのような論理を一切記さない。それどころか、覚一本に至っては、慈恵僧正再誕説を見聞してきた尊恵を清盛が呼び、ほうびをつかわしたという記述をさえ追加する。覚一本では、「示現最初將軍身、悪業衆生同利益」の偈の意味＝清盛が悪業によって滅び、衆生に悪業の恐ろしさを教えた一が、全く理解されていないのである。すなわち、覚一本の「慈心坊」は、清盛の巨大な行動力、「不思議」を説明するために、慈恵

僧正再誕説を単なる出生の異常・神秘として用い、それに驚嘆する態度を見せているのである。既成の論理の中に清盛をあてはめようとするのではなく、「心も詞も及ばれ」ぬ「不思議」の人として清盛を巨大化する覚一本の姿勢が、ここにも読みとれよう。

以上述べてきたように、語り系、とりわけ覚一本の清盛像は、個別の説話のもつ想像力の上に（従来注目されてきた、清盛を直接主人公とする説話のみならず、本来彼とは関係が薄いと思われるような説話をさえ清盛の話の「環」とするという意味を含めて）巨大化され、それによって因果観的構想の、いわば軸ともいふべき役割を果たしている。このような清盛造型による因果観的構想の深化に注目すれば、これまで述べてきた覚一本の構想が、決して単に個人作者の思いつきとか、あるいは一定の論理のもとに多くの話を切りそろえてまとめたという質のものでないことが了解されよう。

四

それでは、上述のように物語をまとめあげた因果観的構想とは、どのような思想に支えられたものであろうか。これまで「因果観的」という言葉を用いてこの構想を説明してきたわけだが、仏教の、輪廻を基底とした因果観は、本来、現報⇌順現業の場合でも、因⇌果を個人的な問題として認識しており、灌頂巻の「父祖の罪業

は子孫にむくふ」に見られるような、「一門滅亡」総体を悪果とするような発想とは、やや異質なものである。

仏教的因果観に基く現報が、罪業を作った本人にのみ報うという「原則」は、日本の仏教説話においてもよく守られているようであり、今試みに「日本説話文学索引」^⑧によって「応報」の項二百二十七例（仏教説話以外の説話も含む）を調べてみても、応報が子に及んでいるものは五例しか認められない。そのうち、子孫の繁栄を説いた、「備後国風土記逸文」⇌「蘇民将来」と、「江談抄」二（大江首人の予言の説話）は、今、考察の対象外におく。また、今昔物語集震旦部巻九―21、41の二話は仏教説話であるが、前者は、狩を好んだ男が女子を失なう話であり、後者は酷暴な獄吏に奇形の子が生まれ、程なく死ぬという話であって、「一門滅亡」というような発想からは遠い。最後に残った「十訓抄」十一―76については後述するとして、大体、仏教的因果観に基いた説話が「子孫の滅亡」を語ることはあまりないといつてよさそうである。このことは、覚一本の因果観的構想が、単に仏教的因果観による物語の再編とは考えがたいことを示しているよう。

そうした意味で、佐々木八郎氏^⑨が物語構想における儒教思想の役割を重視されたのは、卓見だろう。先の灌頂巻の一文も、典拠を挙げるとすれば最も有力なのは佐々木氏の指摘されるように「周易」

の「父祖の善悪は子孫に及ぶ」であろうし、清盛の悪行と子孫の滅亡を関係づける上で、佐々木氏のいわれる「儒教的倫理思想」が少なからぬ役割を果たしていることは確かであると思われる。

しかし、清盛の悪行が清盛自身の墮地獄をもたらしたという構想は仏教的因果観により、子孫の滅亡をもたらしたという構想は儒教的倫理観によった——というように割り切ってしまうことができるだろうか。また、「父祖の罪業は子孫にむくふ」という句も、「善悪——及ぶ」ではなく、「罪業——むくふ」という語を用いていることを、単に誤まった引用と考えてよいだろうか。その点については、もう少し考える余地がありそうだ。

先に「応報」の説話の例として挙げた「十訓抄」十一76は、検非違使別当・源経衡が獄囚を冷酷に扱った応報を、次のように記す。

其後、別当失られける時、かの獄囚の音、耳にあるが如くに聞ゆるとて、臨終も心よからず有けり。其上、重資・師賢とて中納言まで成たるおはせしか共、其末絶にけり。是又、法の理と云ながら、無下に慙愧なき心のほど、罪深く覚ゆ。(中略)此奉公の忠なる事なれども、か様迄の慮りは、罪業の因にもやと、よしなく覚ゆ。

この後には儒教的善政思想に基く評言が長々と続くのだが、だからといって、右に引用した部分をも儒教思想と断じ、「其末絶にけり」

を儒教的倫理によってのみ説明されていると考えることは困難だろう。仏教説話が「子孫滅亡」の話を作り出すことはなかったが、このような事件の説明には、儒教的論理に仏教的論理が混入することがなかったとはいえないのである。

清盛の悪行は、王法—仏法双方に対する破壊であり、またそれゆえにこそ、当時の社会秩序総体に対する破壊なのであった。一門滅亡はその悪行総体の結果と考えるべきであって、仏法に対する悪行は清盛の墮地獄を招き、王法に対する悪行は一門の滅亡を招いた——というように区別してしまうことは困難だろう。仏教的罪業も一門滅亡の因となっていると考えれば、灌頂巻の一文にも、仏教的論理（因果観）が影響を与えていると考えてもよいのではないか。「罪業——むくふ」という語の関連は、儒教的というよりはどう見ても仏教的な発想を見せていると思われる。十訓抄の例と同様、この一文も、儒教的論理（倫理観）と仏教的論理（因果観）が混同されたものであると考えたいのである。

しかし、ここで問題にしたいのは、単に仏教と儒教の論理が混同されているということではなく、それらの論理がいかに物語の構想とかかわっているのかという問題である。それを考えるためにもう一つ注意したいのは、この灌頂巻の文章で清盛の悪行として具体的に挙げられているのが「死罪・流刑思ふさまに行なひ」であること

と、そして、平家物語中で最も詳細に、あるいは悲惨に描かれる「死罪・流刑」が、成親・俊寛ら、鹿谷事件犠牲者のそれであることである。先に述べたように、鹿谷事件の犠牲者達の恨みを、「怨霊の恐しさ」あるいは「思ひ歎きのつもり」として平氏の将来に強く結びつける姿勢を、覚一本は最も顕著に見せている。覚一本において、そうした姿勢で物語を因果観的にまとめあげたことと、この一文の付加とが無関係ではありえないとすれば、鹿谷事件の叙述に見られた、「清盛の横暴↓人の思ひ歎きのつもり↓平氏の滅亡」という構図と同質の内容を、この一文が含み持っていると考えられること、あながち不当ではあるまい。少なくとも、覚一本における因果観的な物語構成には、怨霊観的な考え方によってまとめられた一側面があることは確かだろうと思われる。

怨霊観、あるいは「人の思ひ歎きのつもり」というような考え方を、儒・仏の思想と並べて「思想」と呼ぶことは適当でないだろうし、覚一本にも「怨霊によって平家が滅亡した」等という説明はない。しかし、右のように考えてくると、怨霊観的な考え方によってまとめあげられた一面をも持つ物語の説明として、儒・仏の論理が用いられているということは認めねばならないだろう。そして、そのような「作品」と「思想」の関係こそが、今ここで問題にしたいことなのである。

すなわち、儒教的・あるいは仏教的論理がまず存在し、それによって初めて物語がまとめあげられたというような関係ではなく、「不思議」の人清盛の「心も詞も及ばれ」ぬ悪行と、平氏の滅亡を描いた物語をいかに脈絡つけて語るかという課題が、まず存在したということである。覚一本は、個別の説話そのものに触発されつつ、そこに内在する怨霊観的発想をも生かしてその課題を果たす一方、そうして完成した物語の脈絡―「清盛の悪行による子孫の滅亡」を説明するものとして、儒・仏の論理を、部分的に、混同しつつ引用して、問題の一文を記しているのである。

そのように見てくれば、覚一本が行なったこの一文の付加は、決して安易な「周易」の引用ではなく、平氏興亡の物語を統一的に把握せんとする主体的積極的な営為の上に生み出された論理であったといえよう。そこに示された「思想」は、もはや儒教そのものでも仏教そのものでもない。平氏興亡史を解釈し、物語として再構成するための、物語と離れては存在しえない、いわば「作品の思想」とでも呼ぶべきものではないか。

「構想」という語は、物語の著作に先立って作者の脳裡に存在するものと考えられるのが一般であり、先に引用した渥美氏の「源平家の構想」説も、そうした通念に基く先入観に引かれているように思われる。しかし繰り返すようだが、そもそも、このような構想の

明文化が、語りの中で成長した覚一本に至ってなされたことが、そのような一般概念とは異なる、平家物語の因果観的構想の特殊なあり方を示していよう。

そして、おそらくは成立の当初において、序章に「生者必滅」ならぬ「盛者必衰」の語を記した^⑧「原作者」の姿勢は、既に、既成の表現のままの借用ではなかった。平氏興亡の現実を見つめ、それに即したよりふさわしい集約的・理念的表現を作り出そうとする姿勢は、平家物語流伝の出発点から存在したともいえるのであり、そのような積極的姿勢の継承こそが、同時に、物語を一定の脈絡のもとに再編・統一する力を生みえたのである。そう考えれば、覚一本に至って果たされた達成が、平家物語の流伝過程総体における課題への、一つの解答とさえ呼びうるものであったことが理解されよう。覚一本の達成とは、このような構想上の完成を、重要な一面とするものであると考える。

注

① 佐々木八郎氏の「平家物語評講」、あるいは「平家物語の世界」(「平家物語の達成」所収)に凝縮された成果が、このような傾向の代表であろう。

② 「平家物語の視角」(「文学」昭45・6)なお氏は、この論の中で「平家系」(「源平系」に対する)の名称を用いておられる。

平家物語の因果観的構想

③ 「平家物語の基礎的研究」下篇三二頁。

④ 注③に同。

⑤ 岩波日本古典文学大系による。

⑥ 鎌倉本にも小異の文(注④参照)があるが、同本は覚一本との関係が必ずしも明らかではないので、一応措いた。

⑦ 長門本にはこの一文がある。しかし長門本は延慶本と同様の本文で有王賞讃の句等も有する上、更に「燈台鬼事」を増補し、かえって「邂逅談」的色彩を強めている。結句の付加は語りの本の影響ではないか。

⑧ 覚一本では特に、この断食死が頼家の「干死に」を連想しやすいものであることに注意したい。

⑨ 引用は、慶大蔵斯道文庫本による。

⑩ 引用は、大東急記念文庫蔵古典研究会刊本による。

⑪ 「平家物語流伝考」、「有王・俊寛話をめぐって」。

⑫ 未刊国文資料刊行会、「源平闘諍録と研究」による。

⑬ 「平家物語研究序説」一六二頁。

⑭ 「王法の末…」と結ぶのが自然な形であり、高野本等はそうなっている。

⑮ 巻七、北陸合戦における高橋長綱の最期にも、同様の現象が見られる。

⑩ この点、渥美氏は「原作者の清盛観」として、指摘されている。(前掲書、三二八～三三三頁) あるいはそのように考えられるかもしれないが、本稿では覚一本の構想の整え方の問題としてのみ考えておく。

⑪ 後の課題としたい。
⑫ 富倉徳次郎氏「平家物語全注釈」上巻三八頁。

⑬ 昭和41年、中世文学会。

⑭ 引用は注⑨に同。

⑮ 松本隆信氏「四部合戦状本の裏書について」(注⑨書別冊解題) 春田宣氏「祇王の一考察」(「中世説話文学論序説」所収)

⑯ 後藤丹治氏、「戦記物語の研究」。

⑰ 佐々木八郎氏、「平家物語の達成」五〇頁。

⑱ 境田四郎・和田克司両氏編。

⑲ 注⑳書所収、「平家物語の世界」。

㉑ 鎌倉本では、この部分「父祖ノ罪業ハ子孫ニ及フ」とある。

㉒ 引用は岩波文庫本による。

㉓ 平氏の手で死刑になったのは、厳密に言えば西光一人であり、事実上は成親も死刑といえよう。流刑では、政治的に重要なものは巻三「大臣流罪」であるが、詳細な話としては鬼界島流人譚が第一であることはいうまでもない。

㉔ 因果観の構想の基底には、この他、「神明の罰」といった言葉に表わされる考え方など、考えるべきことが多いと思う。今